

本の ひろば

[月刊]キリスト教書評誌

一般財団法人キリスト教文書センター

1957年7月17日第三種郵便物認可

2017年10月1日発行(毎月一回発行) 第718号

ISSN 0286-7001

出会い・本・人

負うた子に教えられる 高橋優子

森田安一 著
『ハイジ』の生まれた世界 小塩 節

本・批評と紹介

井上良雄 著
キリスト者の標識 関田寛雄

湊 晶子 著
聖書は何と語っているでしょう
鈴木典比古

高橋優子 著
ポップカルチャーを哲学する
ラフェイ・ミシェル

本屋さんが選んだお勧めの本

既刊案内

書店案内

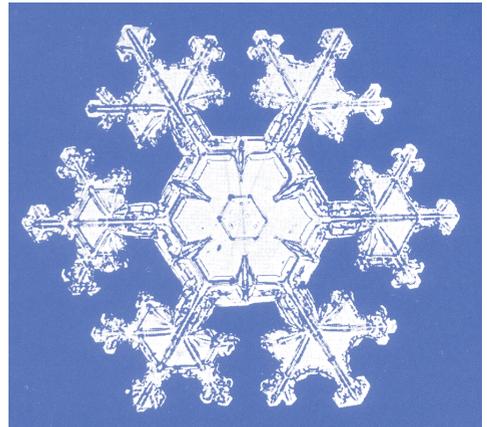
エイレナイオス 著/大貫 隆 訳
キリスト教教父著作集2-II
異端反駁II 土井健司

正田倫顕 著
ゴッホと〈聖なるもの〉 久米あつみ

ローランド・ペイントン 著/出村 彰 訳
宗教改革史 踊 共二

G.プラスガー 著/矢内義顕 訳
カルヴァン神学入門 佐藤司郎

10 OCTOBER
2017



宗教改革と現代

改革者たちの500年と
これから

『福音と世界』編集部編【新教コイノーニア34】

9月14日

連続特集総集編

宗教改革は何を変えたのか。何を継承すべきなのか。多角的なアプローチによる総特集。
 【寄稿者】芳賀力、竹原創、吉田忍、池田裕、吉谷かおる、島しづ子、林巖雄、江藤直純、村山盛雄、有村浩、川向肇、袴田康裕、山森みか、李恩子、藤井創、鈴木浩、具正諱、原敬子、松島雄一、中野泰治、村上みか、小田篤一、菊地純子、澤村雅史、水野宏、桑野萌、堀江有里、永本哲也、木ノ脇悦郎、筒井賢治、小林繁子、朝香知己、渡辺英俊、野々瀬浩司、伊勢田奈緒、蝶野立彦、西川杉子、クラウス・コシヨルケ、山本俊正、深井智朗。◆A5判・本体2200円

キリスト教思想史Ⅱ

アウグスティヌスから
宗教改革前夜まで

フスト・ゴンサレス著／石田学訳

中世とは、夜明けか夕暮れか？ 古代の終焉と近代の誕生を架橋する中世——それはキリスト教に何をもたらしたのか。本書は中世思想史を細部の機微まですくい上げながら、そのダイナミズムを見渡す大きな展望を鮮やかに与えてくれる名編。◆A5判・本体5000円

既刊 キリスト教思想史Ⅰ

キリスト教の成立からカルケドン公会議まで
◆A5判・本体5000円

正教会入門

東方キリスト教の歴史・信仰・礼拝

ティモシー・ウエア著／松島雄一「監訳」

初版以来40年以上、定番の地位を保ち続けてきた名著。

◆A5判・本体4000円

宗教改革史

名著復活！

大好評

ローランド・バイントン著／出村彰「訳」

◆四六判・本体2800円

ポップカルチャーを哲学する

高橋優子 (酪農学園大学准教授) 福音の文脈化に向けて

現代日本を代表するポップカルチャーにはキリスト教的な象徴が溢れている！ それはなぜ？『新世紀エヴァンゲリオン』や『千と千尋の神隠し』から『永遠の0』や村上春樹の『1Q84』にいたる24作品を徹底批評！ そこに流れるキリスト教的なメッセージ=現代の日本人に最も近い福音の現在形を浮かび上がらせた問題作。

大反響！

◆四六判・本体2000円





出会う・本・人

負うた子に教えられる——高橋優子

私は獣医倫理学とキリスト教を教えることを生業としている。獣医倫理学は獣医になる学生と獣医看護師になる学生に対する必修科目なので、新しい領域とはいえ関心が皆無だという者は少ない。しかしキリスト教の方は、キリスト教にはまったく興味のない学生にキリスト教を必修科目として教えるというものだ。私の奉職する大学には理系の学生しかいない上、キリスト教主義に基づく大学だということに気づかないまま入学する学生がほとんどだ。まるで不意打ちのようにキリスト教を履修させられ、「洗脳」されるのではないかと緊張している学生に対して授業をするのはちょっとした「苦行」だ。

未知の知識を受け入れる際、「分かる」と感じるためには既知の知識に結びつけることが必要となる。九歳以上の人間は、外国語を受け入れる際、母語に結びつけるのと同じだ。当初私はキリスト教のあれこれを世界史や日本史の知識に結びつけようと試みた。ところが、最近の学生は高校でどちらもとらずに大学に入学する者が多い。理系ならなおさらだ。たいていの学生が地理しか履修していない。最近十数年の知識しかない者に、二千年の伝統を説明するのは天文学的な仕事だと思った。しかし、最近十数年の知識はあるということだ。たいていの学生が

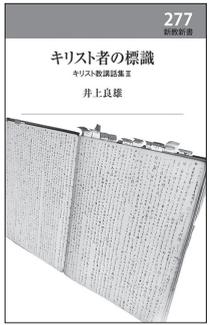
知っていることに結びつければよい。それが、ポップカルチャーの諸作品だった。さいわい学生は今何がはやっているかに敏感だ。みんなが観るといふ映画は観なければならぬし、みんなが読むマンガは読まなければならない。学生たちは、中年の教員に対してもくっつくたくなくいろいろな作品を紹介してくれた。

最初のうちはよくわからないプライドが邪魔して、最近はやっているマンガやアニメにアクセスすることに抵抗を感じたが、聖書はすべての人に、すべてのものになって、福音を伝えよと言っていたような気がする。それで自腹でたくさんマンガを買ひこみ、レンタルDVDを借りて、次から次へと「勉強」することにした。マンガを読みながらノートをとるのははじめての経験だった。その「勉強」の成果を『福音と世界』に二四回連載させていただき『ポップカルチャーを哲学する——福音の文脈化に向けて』（新教出版社）という本になった。学生の世界とキリスト教の世界をつなぐ隠された回路を探る中年教員の努力の日々は続く。

（たかはし・ゆうこ 酪農学園大学准教授）

まさに今日聞くべき使信
井上良雄著

キリスト者の標識 キリスト教講話集Ⅲ



関田寛雄

著者井上良雄の名は、神学生時代に何度も読んだ『啓示・教会・神学』及び『教義学要綱』というK・バルトの著者の訳者として先ず私の心に刻まれた。この度出版された「講話集Ⅲ」には、I、IIに続いて一九四八年から六四年にかけての先生の講演その他が収録されている。

井上先生は一九四五年三月、第二次大戦の最中にK・バルトとの出会いの中でキリスト者になられた。その当時の先生の苦悩の果ての受洗の、瑞々しい雰囲気を感じさせる「教会と文化」と題する聖書研究のテキストは「それ十字架の言は亡ぶる者には愚かなれど」で始まるIコリント一・一八―三二である。「パウロの足はコリントの教会の罪と汚辱の泥沼の中に深く差し入れられていたが、彼の眼はいつもこの泥沼の上に輝いている神の栄光を見つめていた」(一頁)。「ただ文化にとつては躓きであり愚かでないものが、神の力また神の知恵とし出会うところの群、それが教会です」(二四頁)。

特に井上先生の信仰の過程について良き理解を与えられるのは、「私はなぜキリスト教を信するか」と題する一九五八年

の講演と、「バルト『和解論I』を訳し終えて」という一九六一年のスピーチである。芥川龍之介の自死という事件の衝撃と共に「黒い沼のようなもの」(二三四頁)につきまとわれつつ、「生きがいの問題」をめぐってカミュの「地獄」の道を経て、「汝らその労の、主にありて空しからぬを知らばなり」(Iコリント一五・五八)との言に出会い、「よし、もう一度」(二五〇頁)へと転ずる井上先生であった。またバルトの『和解論』の訳了を祝しての集いのスピーチで、「昭和九年」というファシズムの弾圧の中でバルトに初めて接した事の感慨を語りつつ、「しかもそこで私は他のどんな人の書物よりも自分自身の問題が扱われているように思い、最も現代的な問題が語られているように感じたというのは、不思議と言うより他ないように思います」(二五六頁)と述懐している。そしてこの事は生きる事を巡って苦悩する者がバルトに接して感ずる等しい経験であろう。ここにバルトの翻訳者としての井上先生の信仰と生活から生まれる真実の言葉があるように思われる。それは「バルトと私」の一文においても確認されることである。

本書の中で最長の講演は五〇頁に及ぶ「キリスト者の標識」という、ロマ書八・一二以下に基づく、信濃町教会修養会での講演である(一九五四年)。この中で私たちは戦後のキリスト教の歩み、特に「キリスト者平和の会」の責任者として、朝鮮戦争の直中で「バルトにおける国家の問題」(一九五一年)を語るのみならず、「市民に訴える」(一九五二年)と、街頭に立つて叫ぶキリスト者井上良雄の「標識」が最も良く表現されている事を知るであろう。これが本書の表題に選ばれた理由であろう。「その人がまさにキリストチャンである所以のものは何だろうか」(一五三頁)と問いかけつつ、キリストチャンの標識は先ず虚無の現実を突き抜ける「魅りの信仰によって初めて我々の存在そのものが始まる」とし、しかもその生は苦難の直中にある故にパウロの語る如く「我らは望によりて救はれたり」と言うべきである。それは「我生くれば汝らも生くべし」との主の言を根拠とする生である。「苦難」こそがキリスト者の第一の標識であり、更にそこで聖霊によって与えられる「自由」こそが第二

の標識である。それは「アバ父よ」と祈らしめたもうた主の故にあらゆる恐れからの解放を意味する。この「喜び」こそ「キリスト者にとって最も包括的な標識であると言っているけれども」(二八三頁)、それはこの世界を支配する罪の力への「憤りであり闘い」でもあるが、しかも更にそれらを荷う力としての「ユーモア」が最後に強調されなければならない、ということでのこの講演は閉じられている。

この力強い証言は「原水爆とキリスト教」、「世との連帯性——特に政治における」との講演と共にまさに今日、聞くべき使信に他ならない。

(せきた・ひろお) 日本基督教団神奈川教区巡回教師
(新書判・三〇二頁・本体一七〇〇円＋税・新教出版社)



井上洋治著作選集 第2期全5巻 第4回配本 9 南無の心に生きる イエスをめぐる女性たち抄

心に渴きを感じる現代人を真の安らぎへと導く南無の心を説く『南無の心に生きる』と、福音書に登場する7人の女性を通してイエスの温かい眼差しに迫る『イエスをめぐる女性たち』を収録。A5判・252頁・2700円

《いま来たりませ》《神はわが岩》などルターの信仰から生まれた賛美歌を紹介

ルターと賛美歌

ルター研究の第一人者が、ルターが作った賛美歌を楽譜と現代語訳付きで紹介、その作られた背景、そこに込められた神学を解き明かす。

徳善義和
ルターと賛美歌
徳善義和

四六判 並製・250頁・2,592円

日本キリスト教団出版局
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
☎03-3204-0422 03-3204-0457
E-mail eigyout@bp.uccj.or.jp 《価格8%税込》
<http://bp-uccj.jp>

現代文化に伏流する福音の現在形を読み解く

高橋優子著

ポップカルチャーを哲学する
福音の文脈化に向けて

ラファイエ・ミシエル

著者の高橋優子氏（北海道・酪農学園大学准教授）が本書のテーマに関心をもったきっかけは、学生数人にユダヤ・キリスト教的モチーフを用いたアニメシリーズ『新世紀エヴァンゲリオン』の解説を頼まれたことにある。学生たちの熱意に応えるべく、関連諸作品を制覇する「ひとりエヴァ祭り」で準備を整えた著者が、一回の講義の半分を「エヴァ・スペシャル」としたところ、未履修の学生が聴きに來るほどの反響があったのだという。

「そもそもポップカルチャーに無関心だった」という著者がまとめた『ポップカルチャーを哲学する——福音の文脈化に向けて』は、二〇一四年九月から二〇一六年六月まで『福音と世界』に連載された記事を元にしての。アニメ・マンガ・映画・小説など全二四作品を、主にはキリスト教や哲学の視点から各七、八ページほどで解説した本書は、通読はもちろん、興味のある作品の章を拾い読みするのも適している。

著者によると本書は、「キリスト教を現代日本に文脈化する試み」である。前述の通りこの「試み」は、学生の興味と疑問

という「文脈化」へのきっかけを捉えたことに端を発している。それはキリスト教、ヘブライ語聖書学、獣医倫理学などを研究し、複数の大学で教鞭を執ってきた著者ならではの出发点であると言えるだろう。「ポップカルチャー批判ではなく肯定からはじめる」という著者の潔い言葉は、本書のスタンスを明確にするものであり、ポップカルチャーやサブカルチャーの定義をめぐる抽象的な議論を不要にしている。

評者自身も明治期プロテスタントキリスト教の研究を通じて、日本文化には、それとは気づかないような仕方、キリスト教的な要素が浸透していると考えてきた。評者が以前「キリスト教に影響されていない日本人はいない」という意見を述べたところ、「言い過ぎだ」と批判されたことがあるのだが、しかし本書を読んで、評者の意見はさほど外れてはいないとあらためて感じている。本書が扱う作品の中には、意識的にキリスト教的要素を取り入れているケースもある一方、商業的な成功を狙って、元の宗教的な文脈とは関係のない形で使用されている場合もあるが、これらの作品の読者には区別できないことも多い

だろう。本書において著者は、主に学生のコメントや感想を念頭に置きながら解説をしており、それが文脈化をおおいに助けている。

本書の読者は、個々の作品の解説を楽しむだけでなく、こうした作品に見られるキリスト教的要素の「傾向」や「共通要素」に着目することによって、キリスト教的要素の文脈化を理解するためのヒントも得られる。たとえば「言葉の力」や「名前」（神の名前YHWHも含めて）は、多くの作品に見られる要素である。そもそも西洋においては、多くの名前がユダヤ・キリスト教をルーツとしている（評者の名前もヘブライ語由来で「神のような人はいない」という意味である）。本書で分析された作品でも、『七つの大罪』の「ギデオン」や『ジェリコ』といった聖書由来の名前や、『とある魔術の禁書目録』の「神裂火織」、『DEATH NOTE』の「夜神月」のように漢字ならではの遊び心と意味を兼ね備えた名前が登場人物に与えることで、キリスト教的・宗教的な名前や言葉がもつ力を引き出すとしてしている。

あるいは、より根本的なレベルで、各作品を貫く「死生観」を考察することもできるだろう。登場するのが人を食う巨人

であれ、事実上の戦争であれ、名前を書かれた人間を死に送るデスノートであれ、そこで描かれるのは不可避的な死である。また、死後にはキリスト教のような天国と地獄を想定するか、それとも『死神くん』のように善人も悪人も同じところに行くと考えるか、あるいは『境界のRINNE Circle of Reincarnation』のような輪廻を想定するのか——そもそも多くの作品に見られる死後の世界への高い関心は、何を意味しているのか。

人間の実存に関わる問いも目に留まる。人間の罪・許し（赦し）・裁き・復讐は、人間の手で解決できるのか、それとも超越的存在が解決するのか。暗黒の世界にあって、『風の谷のナウシカ』のように救済者が預言され、人間に勇氣と希望を与えるのか。こうしたポップカルチャーの中にキリスト教的要素が取り入れられることによって、私たちは今までとはちがった、より広い視野に立って生について考えることができるようになる。「文脈化の試み」を通じて、本書が教えるのはこの可能性なのだ。

（ラファイエ・ミシエル＝北海道大学文学研究科・文学部准教授）
（四六判・二一六頁・本体二〇〇円＋税・新教出版社）

グノーシス主義の誤りを糾す真摯な批判
エイレナイオス著
大貫 隆訳

キリスト教教父著作集2—II エイレナイオス2 異端反駁II



土井健司

二世紀頃のキリスト教文献を読んでいると、ときに羨ましくなることがある。リヨンの監督エイレナイオスは、子どもの頃、座して話す老ポリュカルポスの聲に接したという。さらに、使徒教父のポリュカルポスを通してヨハネや彼の語るイエスの話を聞いたとも記す。エイレナイオスにとってポリュカルポス、またヨハネやイエスでさえも、記憶のなかの人であり、その言葉も生きた思い出であった。われわれが、もはや文書を通してしか知りえない遠い昔を、彼は、ポリュカルポスの声として自分の記憶のなかに保持していたわけである。

右記を伝えるのはエウセビオス『教会史』（第五巻20章）である。エウセビオスはそのほか復活祭論争など、エイレナイオスに関する興味深いエピソードをわれわれに伝えている。そしてエイレナイオス自身の著作としては『異端反駁』五巻が伝わっている。この著作は、正しくは『不当にもグノーシスと呼ばれるもの』の罪状立証と反駁（H・クラフト『キリスト教教父事典』）であるが、二世紀から三世紀にかけて教会を脅かした異端派の反駁をもくろんだものである。すでに第三巻、第

四巻が小林稔訳で日本語になっている。また第一巻は大貫隆訳ですでに出版されている。今回つづけて公刊されたのは、大貫隆訳の第二巻となる。大著にとりくむ訳者の労をねぎらいたい。「グノーシス」という言葉は、ギリシア語で単純に「知」や「認識」を意味している。となるとエイレナイオスがここで主に反駁するのは、教会のなかで真の知、認識を所有するといつて誇る人びとということになる。そのためエイレナイオスは、この第二巻でこの人びとの「認識」が辻褄の合わないデタラメであると論駁しようとする。たとえば第三部では数の思弁が批判される。数の思弁は、ピュタゴラス派などギリシア哲学にも見られるものであるが、たとえば十二という数について、プロレマイオス派では、十二番目のアイオン（ソフィア）において起こった「情苦」というものは、十二番目の使徒によって十二番目の月に起きたと主張する。ユダが十二番目の使徒であり、イエスの活動は丁度一年、すなわち十二か月であったというのであるが、それぞれその根拠となるものが示されておらず、荒唐無稽であるという。また福音書にみられる「長血をわずらう

女性」の話も十二年間患って癒されたと十二にこだわる。そもそも「数字や単語や文字記号を使って神を探求すること」は恣意的で不確実である。それらは多種多様に変転さわりない、つまりどのようにならでも議論をでっちあげることができる。したがって「数字から教えが導かれるのではなく、逆に教えから数字が導かれるのである」という（訳書一六〇―一七頁）。

人はよほど知を求め、認識を誇るものらしい。自分こそが真実を知っているという類の自称、自慢は、われわれも日々経験するところであろう。問題は、その知の根拠、認識の根拠になるが、これを冷静果敢に問い、批判したのがエイレナイオスだということになる。キリスト教の伝統が、このような知的探求に根差すものであることには多くの文献が示すところである。ここに訳された『異端反駁』も真摯な努力を確認できる古典のひとつである。

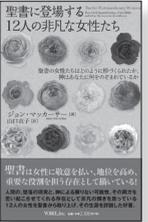
数の関連でちよつと興味を引いたのが、イエスの年齢について

聖書に登場する 12人の非凡な女性たち

聖書の女性たちはどのように形づくられたか、神はあなたに何をのぞまれているか

＊絶賛発売中！

A5判変型・320頁 2,500円＋税



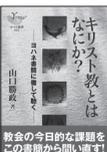
本書は聖書の非凡な女性たちについての洞察や、普段目にも留めなかつたような知識を教えてくれる。この本は、平凡な女性たちである私たちが神の約束に立つとき、非凡な女性に変えられることを教えてくれる。平凡な女性たちの試練、苦難、喜び、勝利ある生活は、様々な方法を通して全員を非凡な女性に変え、私たちに聖書の教えに堅く立てるように励ましてくれる。

キリスト教とはなにか？

ヨハネ書簡に徹して聴く 山口勝政 著

ヨベル新書 07

「信仰を揺るぎないものにする説教」説教者たちや十字架の絵などの写真が適度に配置され、字配りにも字の大小に適切に変化をつけ、余白も適当に取られており、大変読みやすい、自分の信仰にいまひとつ確信を持っていない方々は確かな確信の拠り所を。信仰の豊かな養いを望んでおられる方々は自分の信仰のあり方の再点検を迫られる。講義説教の具体的な見本と励ましを望む方々は御力と御霊の導きをもとめて更に真剣に説教の取り組みへの挑戦を受ける。ぜひ一読を。1,000円



教会の今日的な課題をこの書簡から問い直す！

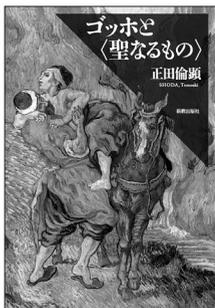
株式会社ヨベル YOBEL Inc.
お問合せは info@yobel.co.jp
〒113-0033 東京都文京区本郷4-1-1
TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858
＊自費出版の専門出版社＊資料・呈

て。プロレマイオス派によればイエスは三十歳で伝道をはじめ、その活動の十二か月後にユダの裏切りによって天に帰ったという。三十歳で伝道をはじめたということについては、ルカ福音書に記されており、エイレナイオスも否定しない。しかしその活動はもつと長く十年以上続いたという。それは使徒ヨハネからアジア州の長老たちが聞いたことだと述べている（二〇五頁）。たしかにイエスの活動は二、三年であったというのは今日常識であろう。しかしこの常識は福音書の記事を過度に時系列に捉えすぎているのかもしれない。この記事は、この辺りについて再考を促す証言となるかもしれない。いかがであろうか。

（どい・けんじ＝関西学院大学神学部教授）
（A5判・二二六頁・本体四〇〇円＋税・教文館）

創見に満ちた力作
正田倫顕著

ゴッホと〈聖なるもの〉



久米あつみ

評者も属する「ポール・リクール研究会」で、「ゴッホの〈聖性〉を研究している人」と紹介されたとき、「難しいことをしているな」と思ったが、このような周到な研究書を書いておられるとは思っていなかった。ご本人からと書店からとほぼ同時に送られてきた本書は、予想を超えてゆたかな装丁と図版を備えた、言葉の十全な意味での力作であり、驚きと楽しみをもって読み、味わった。内容は序論、第一章 キリスト教との関わり、第二章 ゴッホの「イエス」、第三章 ゴッホの「太陽」、結論からなるが、著者は徹底して原画にあたりつつ、もしくは著者自らが見た教会堂や牧師館の写真を用いながら論を進めていく。特にニューネンの古い塔が連続して示される図版の提示には圧倒された。教会堂、牧師館は確かにゴッホにとって描かずにおれないほどの愛着の対象であるが、それはもう、滅びゆくもの、廃棄されていくものの象徴でもある。だがそこに人物、特に農婦が配されて、「聖なるもの」の気配、〈気〉の流れを作り出しているという指摘は興味深い。「農婦」、特にオランダはニューネンの農婦を「引用」してまで描き込んでいること

もしつつ、このような俯瞰的見方も必要なのであるかと納得する。

著者が取り上げた画題は、上記の教会堂のほか、自画像、善きサマリヤ人のたとえ話、太陽、種まきとかり入れ、などがあり、通奏低音のように、あるいは耳には響かぬ弦のきしりのようにイエス像がある。よく知られているように、ゴッホはキリスト像を描いたことはない。ドラクロワの模写作品のほかに。だがドラクロワとジュール・ローランスをもとに描いた「善きサマリヤ人」は、たとえ話を語ったイエスの姿がサマリヤ人の中にも、救われるユダヤ人の中にも認められ、画面中央にイエスの高貴な姿と惨めな姿が一体となって描き出されている、と著者はいう（一一〇頁）。ここであらわされているのは対象と自我の境界が溶け合い両者が渾然となった一元的世界なのだ、とも。それがゴッホの〈聖なるもの〉なのであろう。

自らをイエスと、少なくともイエスの生き方と同一視するまでに救世主の心を求め続けたゴッホが、どうしても彼の姿を絵に表せなかったのは、やはり新教徒、それもオランダの改革派としての信仰、あるいは慎みがあつてのことであろうと評者は

は、ゴッホの原点にあるものを垣間見させてくれる心持がするからである。（それにしても〈オーヴェールの教会〉の美しき、堅牢さは滅びゆく哀れなものではないと評者はつぶやく）。

さて表題の〈聖なるもの〉だが、R・オットーの表現を借りたとはいえ、著者はこの語にニーチェのいう「ディオニソス的」なもの、深淵から噴き出す生命力、エネルギーを託す。時に〈気〉の流れという表現も見られるが、いずれも存在物（人物、建物、糸杉や太陽）の内部からそとへ噴き出すものであつて、自と他を対立させるものでもなく、また賛仰すべき対象として外部に在るものでもない。ゴッホの場合、それは彼の「天才」また「デモン」というほかないエネルギーの噴出、といつてもよいと思うが、著者は「キリスト教の相対化及びイエスの探求を同時代の巨人たちとともに成し遂げた」と言つて、一九世紀末の精神運動の中にゴッホを位置付けている（七三頁）。ゴッホのような特異な個性、他に類を見ないテクニクのすばらしさ（色彩、構図、線）、どんな画題を扱うときにもにじみ出る品位等々を含めて、歴史の潮流の中には収めきれないという気

思う。イエスの姿をキャンバスに移すこと、それは掟を侵すことであつたからだ。すなわち偶像礼拝であり、十戒の第二戒を侵すことになる。たとえ現在は既成の教会や教理から離れていようと、ひとたび新教徒としての信仰告白をした者にとっては不可能に近い所業であつた。

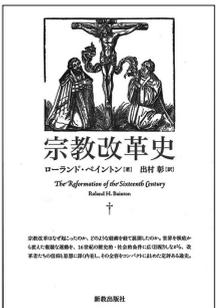
ゴッホの〈太陽〉、また〈種まく人〉や〈刈り入れる人〉、そして〈ラザロの復活〉に「境界をこえて万物に浸透する動的なエネルギー」をみる著者にとっては、こうしたためらいや節度は不要のもの、過去の時代の配慮に思われるかもしれない。しかし癒やす人キリストの姿をラザロの復活の場面から除去し去つたゴッホは、黄色い大きな太陽を背景に置くが、この太陽の中にキリストのまなざしを見るのは自由なのではないか。

気づいた些細な点、ふたつほど。La foi de charbonnier（七頁）は「素朴な信仰」ではなくて「素朴な信仰」がいいだろうし、二二四頁ほかに出てくる terrible tableau は「恐ろしい絵画」ではなくて「すごい絵」ほどの意味ではないかと思う。

（くめ・あつみ『フランス文学者』
（A5判・204+14+口絵38頁・本体一七〇〇円+税・新教出版社）

入門書として筆頭にあげるべき名著
ローランド・ベイントン著
出村 彰訳

宗教改革史



踊 共二

どのような分野であれ、概説書や入門書には執筆者の立場や思想が投影されている。だから概説書はいくつか読む必要がある。複数の宗教改革史概説のなかでまずどれを読むべきか問われれば、評者は自信をもって本書を勧めたい。原著と翻訳の出版年は一九五二年と一九六六年であり、半世紀を超える歳月を経ているが、その視点は先進的であり、良質の入門書としての価値を保っている。読者はなにより、本書をつうじて宗教改革の現代的意義を深く知ることができる。

今年はいつ宗教改革五〇〇年の節目であり、記念企画が目白押しである。評者はルターの町ヴィッテンベルクで開かれた宗教改革研究国際コンソシアムの大会に参加したが、印象的だったのは米国のメノナイト史家J・D・ロスの発題である——「なぜ私たちは、キリスト教界を引き裂き、国家による宗教統制と迫害につながり、世俗化の遠因にもなった宗教改革を記念し、祝うのでしょうか」。聴衆は意表をつかれた。むろん発題者の意図は記念行事に冷水を浴びせることではなく、研究者たちに視点の明確化を促すことであつた。もしべ

イントンが同席していたら躊躇なく答えたであろう。「宗教改革は信仰の自由、良心の自由の出発点だからです」と。

宗教改革史の研究には複数の潮流があり、ドイツ人の研究の多くは権力に寄り添うものであつた。ナチズムに傾倒した牧師や学者も多い。一九三三年のルター誕生四五〇年記念式典のさい、福音主義教会の代表者と親衛隊の将校たちが並んで胸をはり、ナチス式に敬礼する醜態な写真が残っている。ボンヘッフアーやニーメラーのような反対者は収容所に送られた。それは宗教的迫害にほかならない。ドイツの古い研究に影響された日本人の歴史記述にも国家中心的なものが多く、異分子の迫害を治安維持の當為として擁護する研究者もいた。そうした歴史観の克服は始まったばかりにみえる。

一方、北米の宗教改革史研究者の大半は、宗教的理由で欧州を追われた亡命者たちの存在を意識し、信仰の自由を力点をおいてきた。ベイントンはその代表格である。彼の出発点は、宗教的迫害に反対したカステリヨの寛容思想の研究である。その眼差しはつねに、ルターやカルヴァンのような英雄だけでなく、

彼らに蔑視され危険視された群小の自由教会や、批判的な言論活動を展開した個人にも向けられている。そこに信仰の自由、良心の自由の試金石をみているからである。本書の珠玉は「信仰の自由のためのたたかい」と題する第11章である。ベイントンが力説するのは、特定の教会に人を囲い込み、権力をふるって信仰を強いることの不当性と宗教的寛容の重要性である。

ベイントンは会衆派の牧師資格をもっていたが、クエーカーである妻の信仰を受け入れ、良心の兵役拒否者(CO)となり、当局の圧力を受けてもお平和運動や難民救済、公民権運動を支援しつづけた。歴史と現代の問題に同じ姿勢でとりくんでいたのである。訳者である出村彰はイェールでベイントンの薫陶をじかに受け、その歴史観を継承した碩学である。私事にわたるが、思い起こせばこの二人の著作はつねに、迷つてばかりの評者の歴史研究の歩みを照らす明るい灯火であつた。本書の復刊を心から喜ぶたい。

ところでベイントンが敬意をこめて論じた再洗礼派(第5

章)については、半世紀のうちに研究上の大きな進展がみられた。しかし最新の書物にも、再洗礼派に熱狂や逸脱の烙印を押すものがある。迫害する側こそ熱狂者・逸脱者であつた可能性を想定しない無批判な態度である。本書の刊行は、そうした研究状況にも一石を投じるであろう。

本書にはキリスト教倫理の入門書の性格もある。「もしもキリスト者が主キリストに従おうとするならば、彼はピラトやヘロデのごとく裁きの座ではなく、カルバリの丘に登らなければならない」(二七五頁)。カステリヨ論のあとに記されたこの言葉はベイントン自身の立場の表明であり、読者への呼びかけである。二一世紀は宗教改革期に逆行したような不寛容と迫害の時代であるから、本書の意義は前世紀半ばの激動期にも増して大きい。

(おどり・ともじ||武蔵大学教授)
(四六判・三七五頁・本体二八〇〇円+税・新教出版社)



新刊 生命の宗教 キリスト教

「神」をめぐる哲学的考察

竹田純郎著

●A5判並製 本体2500円+税

近代の思想家たちが「神」をどのように解したか、時代を追ってあきらかにし、乏しき時代における生命の宗教、キリスト教の可能性を探る。

【目次】より

序章
生命の宗教、キリスト教
—乏しき時代における宗教の可能性—

第一章
暗い時代の人レッシング、
無一物なる生

第二章
シュライアーマッハー、
プロテスタント神学のカント

第三章
謎めいた老人ディルタイ、
さ迷えるキリスト者

第四章
漂泊者ニーチェ、イエスの道化師

第五章
近代市民ウェーバー、
アジア的キリスト者

第六章
境界の人A・カミュ、
匿名のキリスト者

第七章
無即愛の弁証者田辺元、
成りつづあるキリスト者

終章
乏しき時代における生命の宗教、
キリスト教の可能性

ISBN978-4-86376-059-2

LITHON [リトン]

〒101-0061 千代田区三崎町2-9-5-402
FAX 03-3238-7638

現代人はカルヴァンをどう読むのか？
G・プラスガー著
矢内義顕訳

カルヴァン神学入門



佐藤司郎

今年には宗教改革五〇〇年、一般にはルター五〇〇年のように受け取られているけれども、そしてそれには違いないが、もっと広い意味で、ルターに始まった宗教改革を想起し、われわれの今日の諸課題とともに改めて考えてみるというのが、本来期待されていることであろう。

そうした意味でこのたびゲオルク・プラスガーの『カルヴァン神学入門』が刊行されたことは時宜を得たことであり、われわれは宗教改革の広がりを確認するよい手引きを与えられたことになる。

著者のゲオルク・プラスガーは一九六〇年生まれで、ドイツのジーゲン大学教授。改革派神学のすぐれた研究者として活躍している。カール・バルトに関する研究も少なくなく、昔ゲッツティンゲンで礼拝をご一緒したこともある。堅実な研究には定評がある。

本書は全部で一五章からなり、第一章で「カルヴァンの生涯」の要点をたどったあと、残り一四章で、おおむね原著『キリスト教綱要』にそって、その神学全体を簡潔に、しかし的確に解

説したものである。『綱要』以外のカルヴァンの多くの著作を参照しながら主題の解明を試みる。現代の諸問題との関連を語るころは多くないが、論述の隠れた視点としてそうした今日のわれわれのいまだく問いが取り上げられ、ひそかな対話が試みられていることは明らかである。

一四章のテーマは以下の通り。

第二章「神を認識することと自己自身を認識すること」。

第三章「神の言葉の告知としての聖書」。

第四章「三位一体の神の本質と働き」。

第五章「神の創造者の働きに対する驚嘆」。

第六章「罪——人間の神からの疎外および自己自身からの疎外」。

第七章「イエス・キリスト——王、祭司、預言者。イエス・キリストの三職に関するカルヴァンの教説」。

第八章「キリストから理解されるべき律法は認識と生活の助けをもたらすこと」。

第九章「聖霊の主要な業——信仰」。

第一〇章「神の選びの働き」。

第一一章「神の聖化の働き」。

第一二章「神によって選ばれ、そして形成されるべき教会」。

第一三章「神の全体的な教育学——補助手段としてのサクラメント」。

第一四章「人間性を保護育成するための神の指図としての『国家』」。

第一五章「完成へのあこがれ」。

この中で私には冒頭の第二章「神を認識することと自己自身を認識すること」が、今更ながらかも知れないが、一番面白かった。

神を問うことは、人が自分の実存を問うことと無関係にはな

されない。人文主義者であったカルヴァンのこうした視点は今日のわれわれに示唆するところ大きい。プラスガーは、「両者は互いに関係し、そのつど互いに一方が他方を生み出すのである」(二三三頁)と説く。まさにその通りであろう。われわれも礼拝に参加し、聖書によって神のことを聞きながら、そこで本当の自分と出会うことをしているのではないだろうか。そしてそれによってまたわれわれは神に榮譽を帰し、神を仰ぐことへと導かれる。

一つ一つのテーマについてみんなで語り合いながら学んでいくテキストとしても本書は相応しい。訳者の労に感謝し、大いに用いられることを願ってやまない。

(さとう・しろう＝東北学院大学教授
四六判・二三四頁・本体二四〇〇円＋税・教文館)



宗教改革の問い、 宗教改革の答え

95の重要な鍵となる出来事・人物・論点

ドナルド・K. マッキム
原田浩司*訳



プロテスタントの改革をめぐる問いにわかりやすく、簡潔に、生き活きと答える。キリスト教界全体を劇的に変えた複雑な宗教改革の全体像をマッキムが見事に、明快に整理してみせた。「宗教改革」を理解するための最良の入門書！

A5判・並製
定価【本体2,000＋税】円
ISBN978-4-86325-106-9



株式会社 一麦出版社
札幌市南区北ノ沢3丁目4-10
TEL (011) 578-5888
<http://www.ichibaku.co.jp>
携帯 mobile.ichibaku.co.jp

史学者が探究した名作の深層と誕生の舞台裏
森田安一著

『ハイジ』の生まれた世界 ヨハンナ・シュペーリと近代スイス



小塩 節

アルプスの少女『ハイジ』の物語を、私は幼少年時代に何度も何度も胸を躍らせて読んだ。美しく崇高なスイス・アルプスの空気とそこに生きる明るい少女の姿が、いつまでも幼少のころの私をとらえてはなさなかった。それは、児童文学の作品というより、白銀の峰々と緑の牧場のつらなるスイスの山の香りが、第二次大戦の中に愚かにもなだれこんでいく日本の暗澹たる世相の中で、心から息づくことを許す大気そのものだった。戦後に生をうけた多くの人びともきっとそうだろう。そしてそれは日本だけのことでなく、世界の多くの国の人びともそのような思い出を大事にしているだろう。

さて、その『ハイジ』の生まれた世界を、感傷的な評伝ではなく、正確な史実に基づいて叙述する一書が出版されたので、さっそく手に取って読んだ。甘いテレビ・アニメのいい加減なお話ではあるまいが、わが幼き日の夢と感動を再びよみがえらせてくれるだろうと思っただけである。

読み進めるうちに、この身をゆるがすほどの驚きにとらえられた。巨大な柱のようなものが、少なくとも四本ほど、私をさ

ちのめした。その第一は、『ハイジ』の原著者ヨハンナ・シュペーリが世に出て、生き、書くに至った家系と社会を、ほぼ一世紀にわたり実に精密、正確、冷静に、まるで大きな網を一杯にひろげ、一本一本の糸を残さず数え上げ、語り尽くしていることだ。祖父の代、両親の代、そして彼女自身とその身の周り。およそ言葉の修飾をいっさいこそぎ落して、時代と人を語っているのは、史学者の手練にほかならぬ。いわゆる文学的感動より先に、歴史の事実がさし出されてくる。

第二の大きな柱は、十八、十九世紀に生きていたプロテスタントの敬虔主義（ピエティスムス）という、極めて純粋な信仰集団、そのあり方である。詩人ゲーテも青年時代にその静かな信仰のあり方に深く影響を受けたことはよく知られているが、このように『ハイジ』を生み出した人びとの実生活に、ピエティスムスというものが深い水脈となつて流れていようとは、驚き以外の何ものでもない。ヨーロッパのキリスト教や中世以来の教会については、よく知られているだろうが、具体的に静かな信仰に生きた人びとの明るい謙虚さを知るのは、実に得難い

経験である。

そしてそれ以上に驚くのは、スイスという国の歴史の実態である。スイスは、永世中立の平和そのものの国であると、誰しもが思うだろう。しかし、十八、十九世紀のスイスの経た戦乱、戦争、混乱の数々の多さ、すさまじさには、本書を手にする人は誰しも身の震える思いをすればいい。そしてその実相は突如現われたのではなく、宗教改革つまりカルヴァンの時代からすでにあらわだったのであり、長い苦闘と悲しみの末にスイスは現在の永久平和を勝ち取っているのだ。愚かな人間の社会が、力を尽くしてこれほどの途を歩めたのかと、誰しもが胸を打たれるだろう。賢い人びとが自然にあのアルプスの谷間に生きていたわけではない。

本書から受ける第四の驚きは、作品『ハイジ』が、単なる明るい少女物語ではない、いや、そこには罪の問題を含めて、聖書全体が語りかけ迫ってくる人間存在の根源的な問いかけがある

（おしお・たかしロイツ文学者）
（四六判・二四〇頁・本体三三〇〇円＋税・教文館）

聖書は何と語っているでしょう

湊晶子著

聖書全体から「生と死」について語り、死の悲しみを克服するための根源的問題を問う。「永遠の生」とは……詩編にあった「人間とは何ものなのでしょう。神の被造物である」ということを言葉を変えて言う。自分一人で生きているというのではなく「神の中に生きている」こととなります。神の被造物としての存在をパウロは「神の中に生き、動き、存在する」という表現を引用して述べています。これこそ聖書の強調点として初めから終わりまで一貫して流れている思想なのです。（本文より）

【生きている】「死ぬる】New Up 【永遠に生きている】



【好評再版出来！】ヨベル新書042 ●一九二頁・一〇〇〇円＋税

焚き火を囲んで聴く 神の物語・対話篇

大頭真一と焚き火を囲む仲間たち

藤本 満先生評……筆者も正直、焚き火を囲む者に加えていただけようになりたない。そのような成熟した読者になつてみたい。読者のマインドとスピリットの成長を促してくれる本。

矢木良雄先生評……時間を忘れて読み進んでしまう魅力的な本。ぜひ焚き火の輪に加わって、神学する楽しさを味わってください。神さまの温かいまなざしを感じます。

絶賛発売中！

株式会社ヨベル YOBEL Inc.
お問合せは info@yobel.co.jp
〒113-0033 東京都文京区本郷4-1-1
TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858
*自費出版の専門出版社*資料・呈

広く、深く、壮大、しかも面白い！ 内容の読後感

湊 晶子著

聖書は何と語っているでしょう

「生きること」「死ぬこと」
そうして「永遠に生きること」



鈴木典比古

本書は、湊晶子先生が学長を務められた東京女子大学及び現在も学長を務められている広島女学院大学での聖書研究会における五回の講義を一冊にまとめたものである。本書の書評を出版社から依頼された時、著者の湊晶子先生のいつものあの笑顔を中心に浮かべながら、気軽に引き受けたのだった。

それが読み返しが四回目になりながらもこの読後感をどう書評に結び付けたらよいか、呻吟している。それほど本書の内容が広く、深く、壮大だ。……が、面白いのである。

第一回目は気軽に読み始め、私が存じ上げている湊先生のこれまでの長い人生（現在85歳）を追った。五代も続くクリスチャンホームに生れ、戦前の教育制度の中でクリスチャンとしての強い違和と葛藤を感じながら過し、空襲の際頭部に傷を負いながらも九死に一生を得たこと、戦後フルブライト奨学生としてアメリカに留学し、ウィートンカレッジで学んだこと、渡米の船で将来の夫君とられる湊宏氏に会われたこと、帰国後は東京基督教大学及び東京女子大学教授として、長い大学教員生活を送ったこと、その中で三人の子供を残して夫君は四十四歳

の時に天に召されたこと、再婚なさった新しい夫君も五年足らずで天国に送ったこと、等々。この様に、多難にもみえる人生を送って来たのに、今、私が接する湊先生はいつでも笑顔で前向きであるのは何故なのか。その答えは本書の全篇にあらわれている。即ち、湊先生曰く「私は自らの人生経験を重ねながら、「人は何のために生きるか」と問われれば「聖書という鏡に自らを写しつつ、神の栄光をあらわすために、いかなる苦難をも乗り越えつつ生きることで」と答えます。」

私が本書を二回目に読んだ目的は「人間の死から生へ、そして永遠に生きること」の意味を著者はどう解釈し、自らのものとしたかを知ることであった。

ここで決定的に重要なのは、クリストが「神の子」であり「人の子」であり、更に「主」であるという三位一体の存在であり、本質において三つが等しい実体であるということである。しかしながら、人間は神からのその自律・自立性を主張した（三五頁）。だが、その結果として、人は原罪を受けることになる。この原罪を人間に代って一身で引き受け、人間に罪の赦しをも

たらしたのがクリスト・イエスであった。

この「人の子」は十字架につけられて死んだが、「神の子」として三日目よみがえり、天に昇り、全能の父・神の右に座す「主」になられたのである。

三回目にこの本書を読みなおした理由は著者が述べる女性論にある。「主なる神はそこで、人を深い眠りに落とされた。人が眠り込むと、あばら骨の一部を抜き取りその跡を肉でふさがれた。そして人から抜き取ったあばら骨で女を造り上げられた」（創世記二章21〜22節）。このようにして造られた男性と女性とは人格的に別のものであり、この二つの性が一体となり、パートナーとなるとある（三四頁）。しかし、この男と女は神が食べてはいけなないといましてあった禁断の実を一緒に食べた。著者は、この「一緒に食べた」という行為に男性と女性の罪の同置性を見、罪の本質を見る。この同置された罪から救われるには、「一人の正しい行為によって、すべての人が義とされて命を得ること」（ローマ人への手紙五章18節）が必要であった。一人の正しい行為とはクリスト・イエスによる死とよみがえりと生の復活である。しかし、この男性と女性の罪から救うという同置性は、日本に於いては「家制度」による家父長制の存続によって女性の地位、妻の存在が低いものとされてしまった。明治以降に創立された女子学校（多くはキリスト教主義に基づ

く）においては、この根強い家制度の中でキリスト教に基づく真の女性観とその教育がなされて来たのである。

さて、私が四回目にこの本を読んだのはそのタイトルに関係している。本書のタイトルは『聖書は何と語っているでしょう』というもので質問型なのだ。この質問は一体誰に向って発せられているのだろうか。一つには、著者自身が自分に向って発している自問自答であるとも考えられる。つまり「聖書は何を語っているでしょう」という問いに対して著者は「私はこう思います」という自答を本書にくり返し表明している。しかし、もう一つの型は、第三者である読者（評者も含めて）に対して「聖書は何を語っているでしょう。あなたはどのように思いますか？」という問いかけにしているともとれるのだ。

これは容易な事ではないのである。おそらく非キリスト者にとって勿論そうであると同時にキリスト者にとっても容易ではない。核心はキリスト・イエスを「信じ切る」かどうかという一点に凝縮されているからである。

この一点に関してキリスト者は肯定の答えを表明してはじめて大安心を得るのである。

（すずき・のりひこ 国際教養大学学長）
（新書判・一九二頁・本体一〇〇〇円＋税・ヨベル）

本屋さんを選んだ お勧めの本

バイブルハウス南青山 鈴木淳之介

『Lutherbibel revidiert 2017
Jubiläumsausgabe
ドイツ語旧約聖書続編付』
ルター訳 2017 3305



5,125 円+税
日本聖書協会

今年のお勧めの書籍として、この本を紹介しないわけには参りません。

昨年ドイツ聖書協会より出版されましたルター訳聖書 2017 年 改訂版 (Lutherbibel revidiert 2017) のシリーズは、以前の 1984 年版の改訂版です。ルター訳を冠する聖書は、本書の前文で述べているように博物館入りの年代物 (Museumstück) ではなく、19 世紀より改訂を重ねてきた現代に通用する生きた翻訳なのです。現在は、ドイツ福音主義教会 (Evangelische Kirche in Deutschland) が改訂を担

語解説、聖書地図などが収録されております。また、クラーナハの挿絵のついた「ルターによる聖書への序文」や「翻訳者としてのマルティン・ルター」などの文章がフルカラーで収録されております。聖書本文についても、訳語の変化や小見出しの変化が多くございますが、紙面の都合で紹介は差し控えます。

アンドルー・ペティグリー著「印刷という革命」によれば、ルターの始めた宗教改革は、出版業の活性化を引き起こし、ヴィッテンベルクの町の産業を変貌させるほどのものでありました。それは、ルターの説教と聖書翻訳の印刷からはじまったものではありませんが、同時にクラーナハによる本の装丁のみならず、彼が描いたルターを始めとする宗教改革の人々の肖像による「ビジュアル戦略」が大きな影響を持ったことは確かです。500 年記念にあたり、宗教改革の息吹を感じることができる記念版聖書をぜひお買い求めください。

バイブルハウス南青山

〒107-0062 東京都港区南青山5-10-2

TEL: 03-6418-5230

FAX: 03-6418-5231

E-mail: biblehouse@bible.or.jp

URL: http://biblehouse.jp/

当しております。2017 年版は、書籍や CD-ROM およびアプリなどの様々な形式のメディアで、計 12 種類が出版されております。また、ドイツ聖書協会の HP での聖書本文の閲覧も可能です。本書は、その中の「宗教改革 500 年記念版」として発行されたものです。正式名称は「Lutherbibel revidiert 2017 - Jubiläumsausgabe」です。聖書本文の構成は旧約聖書、アポクリファ (10 書)、新約聖書ですが、それ以外に多くの資料を収録しております。本書の表紙には、ルターの紋章である「白いバラと赤い心臓、黒い十字架」が鮮やかに描かれており、見る人の目を引くでしょう。ルターが自らの神学の目印とし、同時に宗教改革のシンボルとなった紋章がフルカラーで描かれております。本書の前半資料には、ルターの紋章の由来「Die Lutherrose (das Wappendes Reformators)」が冒頭に記され、続いてルターの生涯と信仰 (Leben und Glaube) が 25 頁以上にわたって解説されております。聖書本文を挟んだ後半の資料には、聖書年表や用

『みつけたよ』

泉谷千賀子著



1,300 円+税
いのちのことは社

大阪キリスト教書店 上田玲子

先日、大人げないことに、しかし思いがけず教会で「かくれんぼ」状態になってしまいました。いずれは見つけてもらえるとわかっていても、確かにそうなるまでは心細くなってしまうので……見つけてもらえる喜びを改めて思い知らされました。「自分なんか、いなくなったらきっと誰もわからない・必要とされていない」と思っていたのに、実は誰かに「さがされている・必要とされている」存在だと気付かされる経験は貴重です。そんな思いも込めつつ『みつけたよ』をご紹介します。

フェルト羊毛作家・泉谷千賀子さんによるかわいらしい動物たちが織りなす三つの物語。聖書のみことばが直接的にはなく、わずかな文章のなかにそのエッセンスがぎゅっと込められています。また、羊毛フェルトを使ったオーナメントや、本書に登場する動物のつくりかたも写真つきで丁寧に載っていて、手芸の苦手な私でも挑戦してみたくまりました。

一麦出版社

http://www.ichibaku.co.jp/
携帯サイト mobile.ichibaku.co.jp/



Ichibaku Shuppansha Publishing Co., Ltd.



ドナルド・K. マッキム
原田浩司 訳
**宗教改革の問い、
宗教改革の答え**

95の重要な鍵となる出来事・人物・論点
A5判 定価(本体2,000+税)円
ISBN978-4-86235-106-9

プロテスタントの改革の疑問を簡潔・明快に解き明かす。「宗教改革」を理解するための最良の入門書。



オリヴィエ・ミエ
菊地信光 訳
改革派教会

A5判 定価(本体2,000+税)円
ISBN978-4-86235-107-6

ひとつの教派として確立していく過程を信仰告白・教会規則をもとに紐解く。



バージル・ホール
堀江洋文 訳・解題
**ヨハネス・ア・ラスコ
1499-1560**

イングランド宗教改革のポーランド人
四六判変型 定価(本体2,200+税)円
ISBN978-4-86235-095-6

カルヴァンが理想とした長老制による教会訓練、国家権力と関わりのないかたちの教会として最初の「教会規程」を執筆。

ヴルフエルト・デ・グレーフ
菊地信光 訳
**ジャン・カルヴァン
その働きと著作**

A5判 定価(本体6,800+税)円
ISBN978-4-86235-103-8



カルヴァンに関連する情報をみごとに収集・整理し、16世紀の文脈でその姿を浮かびあがらせた。

サドレート×カルヴァン
石引正志 訳・解題
**ジュネーブの議会と人びと
に宛てたヤコブ・サドレー
ト枢機卿の手紙×ジャン・
カルヴァンの返答**

宗教改革の焦点 01
A5判 定価(本体2,200+税)円
ISBN978-4-86235-011-6



各々の主張が簡潔、明解に示された、論点を理解するための第一級の史料。

渡辺信夫
カルヴァンの教会論〈増補改訂版〉
菊判 定価(本体4,200+税)円 86325-017-8

日本カルヴィニスト協会編
カルヴァンとカルヴィニズム
A5判 定価(本体5,600+税)円 86325-070-3

フォード・ルイス・バトルズ/金田・高崎共訳
「キリスト教綱要」を読む人のために
菊判 定価(本体3,800+税)円 86325-066-6



500
years of Reformation



これからクリスマスシーズン。クリスチャンの皆さまにはもちろん、そうでないかたにこそ、そつとプレゼントしたくなるような心あたたまる一冊です。

『ルターと賛美歌』

徳善義和 著



2,400円+税
日本キリスト教団出版局

「教会といえは賛美歌」というイメージは、クリスチャンであるなしかかわらず多くのかたがお持ちではないでしょうか？ 現在、多くの教会で賛美歌・聖歌は「みんなで」歌われていますし、自分たちの言語を使つての礼拝が執り行なわれています。しかし、それは実はルターがきっかけだったということをご存知でしょうか？ 次にご紹介するのは徳善義和先生著の『ルターと賛美歌』です。

本書はキリスト教音楽季刊誌「礼拝と音楽」に連載された記事をもとに、『神はわがやぐら』『いま来たりませ』をはじめ、ルターが作詞あるいは作曲した五〇余曲（一部は紹介のみ）について、ルターの信仰や当時の時代背

景、さらには著者による訳詞も織りまぜて書かれた、なんとも贅沢な一冊です。本書を読み終わったあと、教会などで歌う賛美歌への意識がちよつと変わるかも知れません。

また本書は「宗教改革五〇〇年記念・読者プレゼントキャンペーン」の対象書籍にもなっています。ご購入後、ぜひ応募してみたいかがでしょうか？

大阪キリスト教書店

〒530-0002 大阪市北区曽根崎新地2-1-15
TEL: 06-6345-2928
FAX: 06-6345-2187
E-mail: ochbook@river.ocn.ne.jp
URL: http://osakachs.web.fc2.ocn.ne.jp

『本のひろば』のバックナンバーをWeb上で閲覧できます。「キリスト教文書センター」のホームページから「書評誌『本のひろば』」にアクセスしてください。

<http://www.bunsyo.or.jp>

2017年6月号

巻頭エッセイ： オット・カイザー教授との出会い 魯恩碩		
オックスフォード キリスト教辞典	E.A.リヴィングストン編、教文館	対談 関川 泰寛 藤原 淳賀
決定版 ひとりの伝道者に注がれた神のまなざし	錦織博義著、ヨベル	エッセイ 錦織 博義
初期キリスト教の宗教的背景 上	H.クラウク著、日本キリスト教団出版局	辻 学
知的障害者と教会	フェイス・パウアーズ著、新教出版社	関田 寛雄
キリストは甦られた	R.ラングウ編、教文館	深井 智朗
受難と復活の賛美歌ものがたり	大塚野百合著、教文館	宗雪 雅幸
異端反駁I	エイレナイオス著、教文館	小高 毅
なぜ平和主義にこだわるのか	M.ケースマン他著、いのちのことば社	岡田 仁

2017年7月号

巻頭エッセイ： 「光の国」から僕らのために 澤村雅史		
聖書を読んだ30人	鈴木範久著、日本聖書協会	月本 昭男
日本基督教団戦争責任告白から50年	「時の徴」同人編、新教出版社	石田 学
文脈化するキリスト教の軌跡	三野和恵著、新教出版社	高井ヘラー由紀
ケンブリッジ・プラトニストの哲学的霊性	三上 章著、リトン	山本 巍
ウェスレー思想と近代	清水光雄著、教文館	竹内謙太郎
オリゲネスの祈禱論	梶原直美著、教文館	久松 英二
ロシア中世教会史	J.フェネル著、教文館	竹内謙太郎
改革教会の伝道と教会形成	袴田康裕著、教文館	関川 泰寛
原子力発電と日本社会の岐路	姜尚中他著、新教出版社	小中陽太郎
宗教と対話	小原克博・勝又悦子編、教文館	芦名 定道

2017年3月号

書名	著・編者、出版社	書評者
巻頭エッセイ： 宗教改革500年の想起 小田部進一		
ルターにおける聖書と神学	上智大学キリスト教文化研究所編、リトン	宮本 新
教会会計	宮本善樹著、教文館	山崎 龍一
主の奇跡と守り	福地多恵子著、ヨベル	白田 尚樹
大崎節郎著作集7 説教集	大崎節郎著、一麦出版社	久野 牧
スピリチュアルな存在として	窪寺俊之編著、聖学院大学出版会	伊藤 高章
竹森満佐一の説教	加藤常昭著、教文館	本城 仰太
語りつづけた言葉	岡崎 晃著、教文館	小塩トシ子
10代のキミへ	高橋貞二郎監修、日本キリスト教団出版局	鬼形 恵子

2017年4月号

巻頭エッセイ： 松居直先生との出会い 藤本朝巳		
『聖書人物おもしろ図鑑』 旧約編・新約編	大鳥 力、中野 実監修、日本キリスト教団出版局	対談 大鳥 力 中野 実
福音書記者マタイの正体	澤村雅史著、日本キリスト教団出版局	中野 実
見えない希望のもとで	永田竹司著、教文館	東 よしみ
新約聖書の学び	越川弘英著、キリスト新聞社	大澤 香
十字軍とイスラーム世界	ロドニー・スターク著、新教出版社	関 沼 耕 平
人生の後半戦とメンタルヘルス	藤掛 明著、キリスト新聞社	藤本 満
わが主よ、わが神よ	竹森満佐一著、教文館	川崎 公平
真実なるものここにあり	森田美千代著、創言社	田中 かおる
アレテア特別増刊号 一見よ、この方を！	日本キリスト教団出版局編	荒瀬 牧彦

2017年5月号

巻頭エッセイ： まるごとの自分を生きたい 大澤秀夫		
旧約文書の成立背景を問う	魯恩碩著、日本キリスト教団出版局	大野 恵正
イラクのキリスト教	スサ・ラッサム著、キリスト新聞社	川口 一彦
旅する教会	永本哲也他編、新教出版社	芦名 定道
旧約聖書ヘブライ語文法書	ハインツ・クルーゼ著、キリスト新聞社	阿部 望
アメリカ映画とキリスト教	木谷佳楠著、キリスト新聞社	大宮 有博
結婚と家族の絆	長島 正・長島世津子著、教文館	崎川 修
私の聖書歳時記366日	田中光三著、ヨベル	藤原 孝行
マルティン・ルター	W.カスパー著、教文館	鈴木 浩

2016年1月～12月に出版されたキリスト教書の中から
全国のキリスト教書店員の投票により大賞が決定しました。

キリスト教本屋大賞

2017

大賞

第1位

聖書人物
おもしろ図鑑 —新約編

中野 実◎監修
1,620円(日本キリスト教団出版局)

人物の名前に注目すると聖書がずっとおもしろくなる。聖書に登場する人物を楽しいイラストで簡潔に紹介。



「キリスト教出版販売協会加盟書店」
(札幌市)北海道キリスト教書店
(盛岡市)善隣館書店
(仙台市)仙台キリスト教書店
(千葉市)恵泉書房
(狭山市)聖公會
(中央区)教文館
(新宿区)ABC(アバコ・ブックセンター)
(杉並区)待晨堂



書店にて
フェア
展開中!



オススメ

アバコブックセンター 加藤久絵さん

旧約編に続いて、今知りたいときにざっと読める気楽さが魅力。イラスト満載、かつ漢字にはふりがながついているので小学生でも読めそう。教師タジタジになってしまうかも？ 自分用にも、プレゼントにもおすすめの一冊。

全国の
キリスト教書店員が選んだ
いちばん読んで
ほしい本

第2位



アッシジの聖フランシスコ
藤城清治◎作 4,644円(女子パウロ会)
21年の歳月をかけて、92歳の影絵の巨匠が描いた、アッシジの聖フランシスコの生涯。

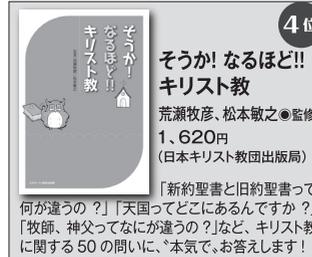
第3位



1分間の黙想 祈りの力
E・M・バウンズ◎原著
1,944円(日本聖書協会)

1日分は、A6判(文庫本サイズ)よりわずかに小さな1ページです。どこにいても短い時間で、聖書の言葉を思い巡らせ、祈ることができます。

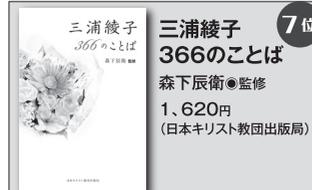
4位



そうか!なるほど!!
キリスト教
荒瀬牧彦、松本敏之◎監修
1,620円
(日本キリスト教団出版局)

「新約聖書と旧約聖書って何が違うの?」「天国ってどこにあるんですか?」「牧師、神父ってなにが違うの?」など、キリスト教に関する50の問いに、本気で、お答えします!

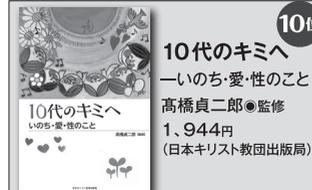
7位



三浦綾子
366のことば
森下辰衛◎監修
1,620円
(日本キリスト教団出版局)

「氷点」「塩狩峠」「銃口」など、三浦綾子の著作から366の珠玉のことばを厳選して収録。1年を通してそのことばに触れられる。

10位



10代のキミへ
いのち・愛・性のこと
高橋貞二郎◎監修
1,944円
(日本キリスト教団出版局)

10代の若者が持つ「いのち」「愛」「性」への葛藤や好奇心によりそい、励ましや希望をこめて贈る、手紙とことば。

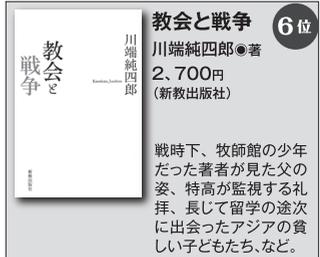
4位



あの時から
空がかわった
星野富弘◎詩画
1,404円
(いのちのこぼし社)

富弘美術館開館25周年記念詩画集。詩画家として自らの原点を見つめ、心の軌跡をたどる。花々へのまなざし、創作への思い、変わっていくものと変わらないもの。詩画45点に書き下ろしエッセイ収録。

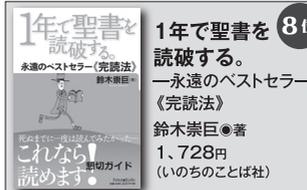
6位



教会と戦争
川端純四郎◎著
2,700円
(新教出版社)

戦時下、牧師館の少年だった著者が見た父の姿、特高が監視する礼拝、長じて留学の途次に出会ったアジアの貧しい子どもたち、など。

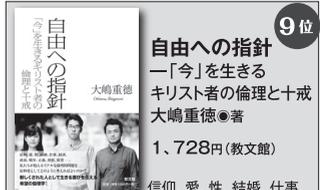
8位



1年で聖書を読破する。
—永遠のベストセラー《完読法》
鈴木崇巨◎著
1,728円
(いのちのこぼし社)

聖書の各書の概要を理解しながら、全体を眺め通すための助けになるガイドブック。

9位



自由への指針
—「今」を生きるキリスト者の倫理と十戒
大嶋重徳◎著
1,728円(教文館)

信仰、愛、性、結婚、仕事、経済、政治、戦争、正義、善悪、欲望……、私たちが抱えるリアルな倫理的問題を信仰者としてどのように考えればよいのか?



(※表示価格は、8%税込価格です。)



宗教改革 500年

『日本宣教の協力体制を作ろう』との思いをうけ、宗教改革500年にあたり、誰でも自由に使える「統一ロゴ」を作成しました。どうぞご利用ください。 日本聖書協会



QRコードで
簡単アクセス!



『いいね!』をクリックして
最新情報をGET!

https://www.facebook.com/christianbookoftheyear

主催：キリスト教出版販売協会 (※表示価格は、8%税込価格です。)



書店名	郵便番号	住所	電話	ファックス	URL	メール	郵便振替
北海道キリスト教書店	060-0807	札幌市北区北七条西6丁目	011-737-1721	011-747-5979	http://www.jp-shop.com	sasaki@jp-shop.com	02770-2-56520
善隣館書店	020-0025	盛岡市大沢川原3-2-37	019-654-1216	共用		zenrinkan_syoten@yahoo.co.jp	02350-0-874
仙台キリスト教書店	980-0012	仙台市青葉区1-36 敷地ビル1F	022-223-2736	共用		fqcwk524@ybb.ne.jp	02230-0-31152
恵泉書房	260-0021	千葉県船橋市2-1-1 新中央ビル	043-238-1224	043-247-3072	http://www.keisen.christian.jp	keisen@vesta.ocn.ne.jp	00120-9-43619
教文館	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3561-8448	03-3563-1288	http://www.kyobunkwan.co.jp	xbooks@kyobunkwan.co.jp	00120-2-11357
聖公書店	350-1331	埼玉県狭山市新狭山1-5-1	042-900-2771	042-900-2722	http://www.avaco.info	avaco@avaco.info	00160-2-18410
アバコ・ブックセンター	169-0051	東京都新宿区西早稲田2-3-18	03-3203-4121	03-3203-4186	http://www.taishindo-books.jimb.com/	taishindo@icom.home.ne.jp	00110-8-95827
待農堂	167-0053	東京都杉並区西荻南3-16-1	03-3333-5778	共用	http://biblehouse.jp	biblehouse@bible.or.jp	00160-2-18410
バイブルハウス南青山	107-0062	東京都港区南青山5-10-2	03-6418-5230	03-6418-5231	http://www.biglobe.ne.jp	sksch@mva.biglobe.ne.jp	00250-4-2512
横浜キリスト教書店	231-0063	横浜市中区花咲町3-96	045-241-3820	045-241-5881	http://www.biglobe.ne.jp	sksch@mva.biglobe.ne.jp	00560-8-51419
清光書店	951-8114	新潟市営所通一番町313	025-229-0656	共用	http://www.s-seibun.co.jp/	info@s-seibun.co.jp	00810-8-26558
静岡聖文舎	420-0866	静岡市葵区西草深町20-26	054-260-6644	054-260-5612	http://nagoya-seibunsha.coocan.jp/	nagoya-seibunsha@nifty.com	00810-5-14073
名古屋聖文舎	464-0850	名古屋市千種区今池5-28-4	052-741-2416	052-733-2648	http://web.kyoto-net.or.jp/people/kijordan/	kijordan@mbox.kyoto-net.or.jp	01010-2-594
京都ヨルダン社	602-0854	京都市上京区荒神口通河原町東1-1-15	075-211-6675	075-211-2834	http://osakacbs.web.fc2.com/	ochrbook@river.ocn.ne.jp	00990-3-43009
大阪キリスト教書店	530-0002	大阪市北区曾根崎新地2-1-1	06-6345-2928	06-6345-2187	http://www.sinseikan.jp/	info@sinseikan.jp	01750-5-10932
バイブルハウスびらぎの森	591-8041	堺市北区東雲東町1-1-16	072-257-0909	072-253-6132	http://www.okinawacbs.com/	okinawacbs@yahoo.co.jp	00160-2-18410
神戸キリスト教書店	650-0021	神戸市中央区三宮町3-9-18三陽ビル2F	078-331-7569	共用	http://www6.ocn.ne.jp/~tcs/	tokushoten@shirt.ocn.ne.jp	01360-4-1958
広島聖文舎	730-0841	広島市中区布入町12-7	082-208-0022	082-208-0177	http://www.geocities.jp/matsujama_1007/mexlim	sksch@dokidoki.ne.jp	01650-1-2120
徳島キリスト教書店	770-0052	徳島市中島田町3-57-1	088-633-6335	共用	http://www.geocities.jp/matsujama_1007/mexlim	sksch@dokidoki.ne.jp	01780-4-39965
松山キリスト教書店	790-0804	松山市中一万町1-23	089-921-5519	089-921-5413	http://www.sinseikan.jp/	info@sinseikan.jp	01750-5-10932
北九州キリスト教書店	802-0022	北九州小倉北区上雷野5-2-18	093-967-0321	共用	http://www.okinawacbs.com/	okinawacbs@yahoo.co.jp	020308-1283
新生館	810-0073	福岡市中央区舞鶴2-7-7	092-712-6123	092-781-5484	共用		
キリスト教書店ハレルヤ	862-0971	熊本市大江4-20-23	096-372-3503	共用			
沖繩キリスト教書店	903-0207	中頭郡読字嶺777	098-943-7221	共用			

※一般書店関係の方は 日キ販営業部 TEL 03-3260-5670 にご連絡ください。

既刊案内 (2017年6月～7月) (定価はすべて本体価格+税)

編・著・訳者	書名	判型	頁	本体価格	版元	発行日
上田光正	日本の伝道を考える4 日本の教会の活性化のために	A 5	328	2,100	教文館	6/20
吉田隆	カルヴァンの終末論	A 5	272	2,900	〃	6/20
森田安一	『ハイジ』の生まれた世界 —ヨハンナ・シュピーリと近代スイス	四六	240	2,300	〃	6/25
倉松功	宗教改革と現代の信仰	四六	112	1,500	日本キリスト教団出版局	6/5
大住雄一	シリーズ わたしたちと宗教改革2 聖書 —神の言葉をどのように聴くのか	A 5	120	1,400	〃	6/24
藤本満	シリーズ わたしたちと宗教改革1 歴史 —わたしたちは今どこに立つのか	A 5	256	2,400	〃	6/30
井上良雄	キリスト者の標識 —キリスト教講話集III	新書	1700	302	新教出版社	6/30
牛島信義原作 村井みどり、 牛島幹夫監修	せいしょものがたり	A 5	214	1,200	キリスト新聞社	6/5
袴田康裕編	地の塩となる教会を目指して	四六	378	3,200	一麦出版社	6/3
小塩節	「神」の発見 —銀文字聖書ものがたり	四六	174	1,500	教文館	7/20
D. スチュワート 著 山吉智久訳	旧約聖書の釈義 —本文の読み方から説教まで	A 5	270	3,500	〃	7/30
原敬子	キリスト者の証言 —一人の語りと啓示に関する 実践基礎神学的考察	A 5	256	3,800	〃	7/31
テイモシー・ウェア著 松島雄一監訳	正教会入門 —東方キリスト教の歴史・信仰・礼拝	A 5	400	4,000	新教出版社	7/31
ローランド・ベイントン著 出村彰訳	宗教改革史〔名著復刊〕	四六	375	2,800	〃	7/31
井上良雄	待ちつつ急ぎつつ —キリスト教講話集IV	新書	288	1,700	〃	7/31
徳善義和	ルターと賛美歌	四六	250	2,400	日本キリスト教団出版局	7/11
漆晶子	聖書は何と語っているでしょ —「生きること」「死ぬこと」 —そして「永遠に生きること」	新書	192	1,000	ヨベル	7/1
武田純郎	生命の宗教 —「神」をめぐる哲学的考察	A 5	224	2,500	リトン	7/25
加藤常昭	自伝的伝道論	四六	170	1,600	キリスト新聞社	7/5

福音と世界

2017年10月号

特集 かざることの神学

寄稿者 池田裕、三橋順子、八木谷涼子、
アートワークロサ（インタビュール）

ロシア革命の百年後に 福嶋揚／聖書に侵入し
たヨブ記 長尾優／好評連載 台湾キリスト
教史（高井ヘラー由紀）、第一テモテ書（辻学）、
現代神学の冒険（晋名定道）、レヴィナスの
時間論（内田樹）、聖書とわたし（板垣雄三）、
アメリカの神学と教会のいま（吉松純）ほか

A5判・本体588円・〒70円
定期購読についてはお気軽にご相談下さい。

新教出版社 TEL: 03-3260-6148
Email: sales@shinkyopb.com

編集室から

人生に興味がある。だから、都筑響一の本はいつも楽しみ。最近、改めてばらばら読んだのは『演歌よ今夜も有難う——知られざるインディーズ演歌の世界』（平凡社）。先日図書館で目にして読み直したのだけど、やっぱり面白かった。

都筑が一七人の「インディーズ」演歌歌手にインタビューし、その人生をまとめたもの。何年も車で全国を走り回り、車中泊をしながら歌い続けている人。年中無休で駅前で歌う人。清掃車の運転をしながら、美容院で働きながら歌う人。紅白歌合戦には出てこないそういう方々が、今日もスナックや健康ランド、そして路上で歌い続けているのだ。

なぜそういう人生を選び取ったのか。どうしてそうまでして歌わざるをえないのか。何が歌へと駆り立てるのか。何を考え、どう成長してきたのか。都筑の熟練の文章が、読者をぐいぐい

と一人ひとりの人生に引き込んでいく。

この本を読みながら、信仰者の人生を思った。

『共助』という小さな雑誌を毎号読んでいた。その最新号にIさんの葬儀説教が掲載されていた。お姿を拝見したことはあったが、こういう人生だったとは存じあげなかつた。

一九三五年生まれ。脳性麻痺があり、幼稚園を探しまわつたがどこも受け入れてくれない。最後に行きついたのが教会付属の幼稚園だった。母はまもなくその教会で洗礼を受けた。Iさんも同じ恵みにあずかり、生涯、教会の信仰に生きた。軍属であつた父は、敗戦間際、自ら命を絶つた。

戦後、Iさんは平和運動に深く関わつた。自らの「障がい」、そして父の罪と死を、神の計画の中に位置づけ、平和を求め、働きを主の召しと受け止めたのだ。

こうした一人一人の人生に根ざした神学は、どういう形を取るのか。そういう試みはきつとあるはず。学びたい。（土肥）

本のひろば 2017年11月号 予告

本・批評と紹介・D・スチュワート著『旧約聖書の釈義』、A・マクグラス著『神学のごよび』、原 敬子著『キリスト者の証言』、上田光正著『日本の教会の活性化のために』、小塩 節著『神』の発見』、藤本 満著『シリーズ わたしたちと宗教改革1 歴史』、倉松 功著『宗教改革と現代の信仰』他

日本語で書き下ろす聖書注解シリーズ、2017年10月刊行開始予定!

第1回配本は改革者ルターの愛した書簡!



NTJ 新約聖書注解 ガラテヤ書簡

浅野淳博

(関西学院大学教授)

第1回
配本

教会の破壊者だったパウロが、異邦人宣教の使徒となった。その背後にある歴史と思想とを小アジア諸教会に寄り添って語るガラテヤ書は、キリスト教神学の礎を築いた。

伝統的な理解から最新の研究まで、豊かな研究成果に学びつつ本書簡を読み解く。

2017年10月上旬刊行
シリーズ刊行開始記念
特価5,184円

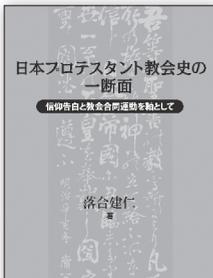
2018年3月31日まで

◆A5判 上製・538頁
通常価格6,480円

日本プロテスタント 教会史の一断面

信仰告白と教会合同運動を
軸として

落合建仁



2017年9月25日刊行予定

明治以来のさまざまな教派の信仰告白制定過程を追いつつ、教会合同運動と日本基督教団成立の関係を問う。

◆A5判 上製・304頁・3,888円

こころの賛美歌・唱歌 あのなつかしいメロディーと 歌詞を歌う

大塚野百合 監修

「朝日は昇りて」と「蛍の光」など同じメロディーの賛美歌と唱歌、思い出深い賛美歌から27曲を、楽譜と歌詞、カラー写真を添えて紹介。

◆B5判変型 上製・64頁・1,728円



2017年9月25日刊行予定

キリスト教教父著作集 3/III

エイレナイオス5 異端反駁V

大貫隆記



● A5判函入・182頁・本体4,600円
聖書箇所を援用してグノーシス主義を論難。肉体の復活、終末における万物の完成に関する論述を中心に、救済史的・啓示史的歴史神学を展開する。エイレナイオスの主著の邦訳、遂に完結！

シリーズ既刊

- 2/I エイレナイオス1 異端反駁I ● 本体3,400円
 - 2/II エイレナイオス2 異端反駁II ● 本体4,000円
 - 3/I エイレナイオス3 異端反駁III ● 本体3,800円
 - 3/II エイレナイオス4 異端反駁IV ● 本体4,800円
- 1・2は大貫隆記、3・4は小林 稔訳

9月の新刊 (価格表示は税抜)

植松誠(日本聖公会首座主教) 推薦!



信頼のしるし 信経とは何か
 ローン・ウィリアムズ 伊達民和監訳
 使徒信経とニケヤ信経を通じて、キリスト教信仰の豊かさ・深さを伝える。全聖公会の精神的支柱である前カンタベリー大主教の初の邦訳書！

オンデマンド版発売!

イングランドの宗教

塚田理



● A5判・640頁・本体6,500円
 カトリックか、プロテスタントか? 〈ウィ
 ア・メデア〉の教会、エキュメニズムを
 推進する教会とは? 16世紀ヘンリー8
 世の宗教改革以来、真理と多様性の一
 致を求めてダイナミックに変貌を続ける
 聖公会の歴史・神学・未来のヴィジョン
 に迫る。

さらなる読書のために

西原廉太

● 本体1,200円
 聖公会が大切にしてきたもの
 成立から現代教会の姿まで分かりやすく叙述。明快で簡潔なアングリ
 カニズム入門書の決定版!

一九五七年七月一日 第三種郵便物認可
 二〇一七年十月一日発行 (毎月一回) 日発行
 本のひろば 第七一八号 二〇一七年十月号

発行所 千代田区北千代 東京都新宿区新小川町九一 一般財団法人キリスト教文書センター
 電話〇三三三六〇一六五二〇 振替〇〇七〇七五一一一六七九
 発行人 本村利春 編集人 土肥研一 印刷所 (株)平河工業社
 発売所 日本キリスト教書販売株式会社 電話〇三三三六〇一五六七〇

定価七八円(税抜七二円) (〒62円)
 一年分一三〇〇円(送料別)



教文館

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1 TEL03-3561-5549 (出版部)
 本のご注文は (e-shop 教文館) へ! <http://shop-kyobunkwan.com/>

e-shop教文館